AIV部

複文(2) まえ・あと・とき

このAIV部では「まえ・あと・とき」といったアスペクト補完名詞を扱いつつ，絶対テンスと相対テンスの関係について考える。

A9章では，絶対テンスと相対テンスがどのような関係にあるのかについて考察し，その関係を図示する。

A10章では，「まえ・あと・とき」による名詞節を持つ複文の中の主文動詞と従文動詞のテンスとアスペクトの関係を，未来・過去・現在のテンス別に考察し，図示する。

A11章では，アスペクト補完名詞「とき」の特性について考察する。また，複文の時の構成を簡単に示すために，時の要素を並べることを考える。

A９章

絶対テンスと相対テンス

A9.1　複文中の動詞のテンスとアスペクト

A9-1〉　彼が歌うまえに，私が話す。

という複文がある。パーティーの出し物の順序について述べているような文である。「彼が歌う」という従文が時を表す名詞「まえ」を修飾し，名詞節を形成している。

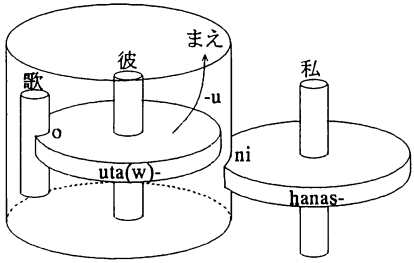
名詞節　　
彼が歌う　まえ　に　**私が話す。**
従文　　主文

図A9-1

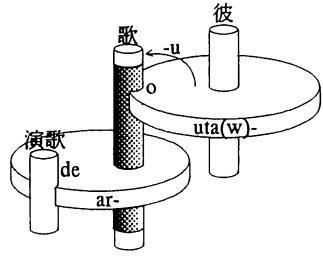
名詞節　　
彼が歌う　歌　Ø1は　**演歌だ。**
従文　　主文

図A9-2

名詞節は主文の動詞(話す)に対して必ず格において存在する。ここでは名詞節は包含実体(『文法』6.3～6.7)を形成しており，これが「に格」にある(図A9-3)。



図A9-3 彼が歌うまえに，私が話す



図A9-4 彼が歌う歌は演歌だ

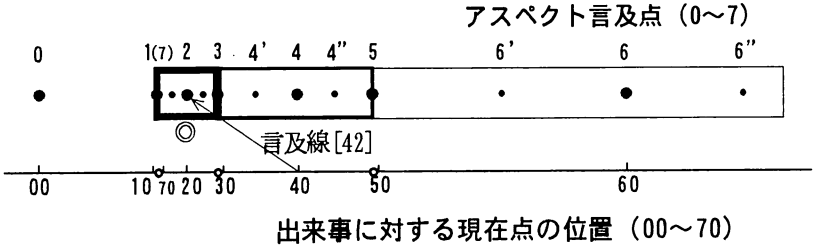
本章では主文，従文をこのような関係にあるものとする。

なお，参考として，時に関わらない一般の名詞「歌」を修飾する形で形成

されている名詞節を持つ複文「彼が歌う歌は演歌だ。(図A9-2)」と，その構造(図A9-4)を示しておく。(一般の名詞が修飾される場合はＡＶ部で扱う。)

動詞が文の中で使用されるときは，テンスとアスペクトを伴うから，この複文中の「歌う・話す」という動詞のそれぞれのテンスとアスペクトがどのようになっているのかは明らかにされなければならない。(ただし，動詞が質を表すものとして使用される場合はこの限りではない。A14章参照)

なお，本章及び続く各章では，テンス・アスペクトの関係を[42]のような２桁の数字で表現している。これは図A9-5 として示してある「テンス・アスペクト２桁数表示基準図」(『文法』図17-1 及び『発展A』図A4-5)に基づいている。



図A9-5　テンス・アスペクト２桁数表示基準図

[42]というのは，「話していた」のように，[40]という「出来事の完了後」である現在点から，[2]という「進行中」のアスペクトに言及する，という意味である。[42]は[40]＋[2]という足し算で求められる(『文法』第17章)。

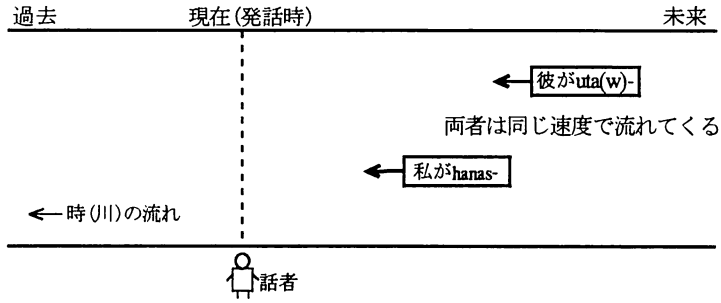
A9.2　２つの出来事の先後関係と話者の位置

A9-1〉　彼が歌うまえに，私が話す。

ここには状況として，「彼がuta(w)-」という出来事と「私がhanas-」という２つの出来事があり，この文を発話している話者がいる。

話者はこの複文において，発話時より一定時間の経過した後に，まず「私が hanas- 」という出来事が生起し，次に「彼が uta(w)- 」という出来事が生起することを表現している。この発話内容を時の流れモデル(時空モデ

ル)図で示せば図A9-6のようになる(『文法』16.1)。



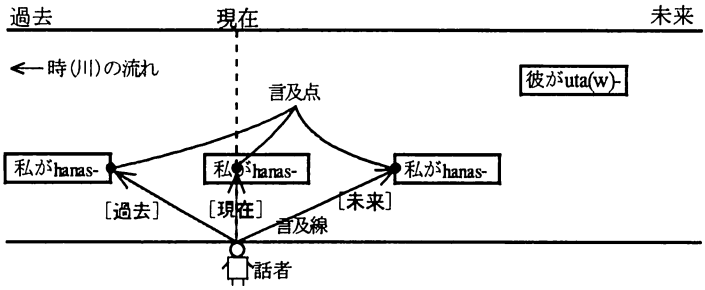
図A9-6　話者の位置と2つの出来事の位置

時間的位置関係はこのようなものとしてとらえられる。

A9.3　絶対テンスと相対テンス

テンスとは，時間的基準点と出来事位置の時間的先後関係をとらえる概念である。「絶対テンス」と「相対テンス」がある。

1) 絶対テンス



図A9-7　絶対テンス［過去・現在・未来］

話者の発話時点(現在)を基準点とし，出来事の時間的位置をこの基準点との関係でとらえるのが絶対テンスである。単文の述語動詞や，複文内の主文の述語動詞が絶対テンスをとる。［未来・現在・過去］の三者を持つ。

「現在」は未来と過去の転換点であり，瞬間である。

図A9-7 のように，時空モデルでは，絶対テンスは話者と言及点を結ぶ矢印「言及線」で表示される。

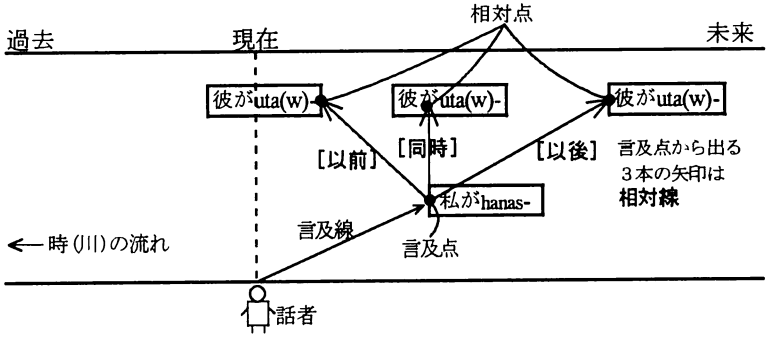
言及点にはいくつかのものがある(図A9-5 において黒丸と◎で示されている。『文法』第16章，第17章参照)が，図A9-7 ではそれぞれ適当な言及点(最内視界言及点・最短言及線)を選んで使用している。

右向きの言及線が未来を，ほとんど真上を向いた言及線が現在を，左向きの言及線が過去を表す(『文法』17.3)。

日本語では動詞の絶対テンスだけを取り出して形態で表すことはできないことが多い。「食ベル」の「ル -ru 」は，たとえば[01][未来・開始]のように，また，「食ベタ」の「タ =t-Ø=a-Ø 」は，たとえば[43][過去・完了]のように，テンスとアスペクトの両方を要素として含んでいる。

一方，たとえば「話しテイタ」[42]のような場合には，「テイ=te-Ø=i-」の部分が進行中のアスペクト[2]を，「タ =t-Ø=a-Ø 」の部分が過去のテンス[40]を表していると考えられる。このような場合にはテンスとアスペクトを別々に形態として取り出すことができる。

2) 相対テンス



図A9-8　相対テンス［以前・同時・以後］

図A9-8 に見るように，複文内の主文動詞(話す)の言及点を基準点とし，従文出来事(歌う)の時間的位置をこの基準点との関係でとらえるのが相対テ

ンスである。

時を表す名詞節そのもの及び名詞節中の従文動詞が相対テンスをとる。［以後・同時・以前］の三者をもつが，これは絶対テンスの［未来・現在・過去］に対応するものである。

時空モデルでは，相対テンスは(絶対テンスの)言及点と従文出来事を結ぶ矢印「相対線」で表示される。相対線の指し示す点を「相対点」と呼ぶ。

右向きの相対線が[以後]を，ほとんど真上を向いた相対線が[同時]を，左向きの相対線が[以前]を表す。

相対テンスのテンス・アスペクト２桁数表示は，図A9-5 に示した絶対テンスの基準図に準じて行うものとする。

では，次に，絶対テンス・相対テンスとアスペクトの組合せを検討する。

「従(属)文」と「節」と「格」の関係はどうなっている？ → p. 118
「絶対テンス」と「相対テンス」の関係は？ → p. 120
「相対テンス」は従文に出る？ → p. 121
従文に「絶対テンス」が出ることもある？ → p. 136
「切符を買ったとき，財布を出した」…いつ出した？ → p. 137
「今度テレビを見たとき，このビールを飲む」…いつ飲む？ → p. 139
名詞を修飾する動詞は７種類のテンス的あり方がある？ → p. 147

A10章

複文のテンスとアスペクト

この章においては，絶対テンスと相対テンスとを組み合わせて考察する。各節での組み合わせは次のようになる。アスペクトには適宜言及する。

節	絶対テンス	相対テンス		
A10.1	未来	(1) [以後]	(2) [以前]	(3) [同時]
A10.2	過去	(1) [以後]	(2) [以前]	(3) [同時]
A10.3	現在	(1) [以後]	(2) [以前]	(3) [同時]

A10.1　絶対テンスが未来である場合……「私が話す」

未来(1)[以後]　彼が歌うまえに……従文出来事が[以後]の場合

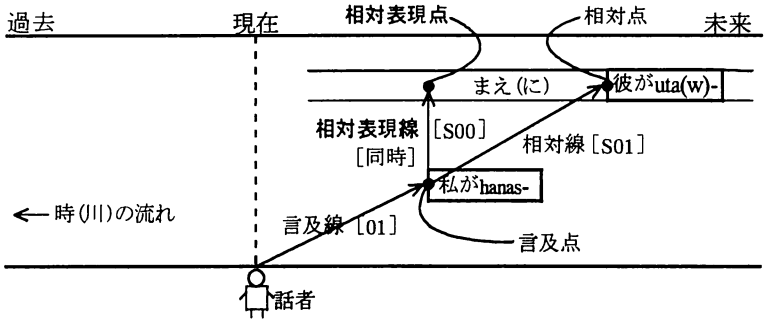
A10-1〉　彼が歌うまえに，私が話す。

という複文の場合，従文出来事「彼が歌う」の時間的位置は，図A9-8 において３つある「彼がuta(w)-」出来事のうちの，相対線が［以後］を示している「彼がuta(w)-」出来事の位置である(図A9-6 参照)。

図A10-1 に見るように，「彼が歌うまえに」という時点は，「私が話す」時点と同一である。日本語では時を表す名詞節＋格(彼が歌うまえに)の示す時間的位置は，常に「主文出来事(私が話す)の言及点」と[同時]の関係に位置する「相対点」において表現される。

相対線は[以前][同時][以後]の３本があるが，複文において表現されるのは[同時]の相対線のみである。それで，特に[同時]の相対線を「相対**表現**線」と呼び，[同時]の相対点を「相対**表現**点」と呼ぶことにする(図A10-1)。

[以前][以後]のものは「相対線・相対点」のままにする。**「時の名詞節＋格」のテンスは[同時]なので無視されやすい(時の相対テンスは気づかれにくい)。**



図A10-1　彼が歌うまえに，私が話す

図A10-1 において確認できるように，従文出来事「彼が uta(w)- 」は相対表現点には直接関わることができない。それで，従文出来事はアスペクトを補完的に明示する名詞(「まえ・あと」など)を必要とする。動詞が動詞を直接修飾することができないことも，このような名詞が必要であることの理由である(「未来(3)[同時]」参照)。

この場合は「開始まえ」のアスペクトを補完表示するために名詞「まえ」が採用される。「まえ」領域の補完により，従文出来事(歌う)は相対表現点と関わることができるようになる。

A10-2〉　彼が歌う(uta-u)まえに，私が話す　(構造図は図A9-3)

このとき，従文動詞「歌う」は「まえ」というアスペクト領域を示す名詞を修飾している。アスペクト領域「まえ」は出来事 uta(w)- の(絶対テンス式に言えば[未来・開始]にあたる)［以後・開始］を示す相対点において「歌う」と接し，この点において関係を実現している。そこで uta(w)- が名詞「まえ」を修飾するのは［以後・開始］を表すアスペクト形式，つまり -(r)u においてであることになる。それで従文動詞「uta(w)-」は「uta-u」という形式をとることになる。

「まえ・に」の「に」は「まえ」の領域中の一点を指し示す機能を持って

いる。このとき指し示される一点は，言及点と同時の「相対表現点」である。相対表現点と言及点は常に[同時]であるので，相対表現線は常に上を向き，２桁数表示では[S44](図A10-4)などのように同じ数字が並ぶ(『文法』17.2, 17.3 ②)。(１点ではなく，幅をもたせる場合は Ø2格になりやすい。)

図A10-1 では，相対表現線は出来事 uta(w)- の開始まえのアスペクトを示しているので[S00]となる(図A9-5, [S00]＋[S0]＝[S00])。

相対線を２桁表示する場合には，[S01]のように[S]を添えることにする。特に必要がある場合，相対表現線には[SH]を添え，[SH44]のようにする。言及線には[01]のように何も添えないでおく。

相対点のズレ……ここで一つ重要なことは，時を表す名詞節の節として示すテンス・アスペクトと，従文動詞の示すテンス・アスペクトとが異なることである。

上例では，名詞節(歌うまえ<に>)のテンス・アスペクトは[同時・開始まえ][S00]であるが，従文動詞(歌う)のテンス・アスペクトは[以後・開始][S01]である。

つまり，相対表現線([S00])と相対線([S01])がずれていて，二つの相対点が一致しないのである。この現象を「相対点のズレ」と呼ぶ。(後で見るように，「とき」にはこのズレがほとんどない。「とき」の場合は「従言及点」と「相対表現点」のズレの形になる。A11.3)

未来(2)[以前]　彼が歌ったあとで……従文出来事が[以前]の場合

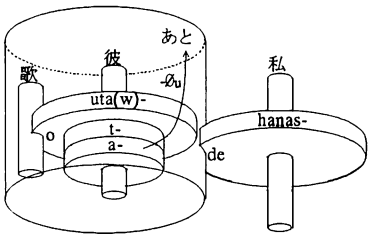
では，「歌ったあとで」の場合はどのようになるだろうか。絶対テンスはやはり未来「私が話す」である。

図A9-8 の［以前］にある「彼がuta(w)-」という出来事の時間的位置を示す場合には

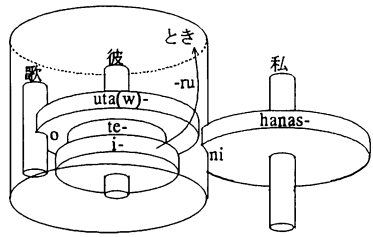
A10-3>　彼が歌った(utaw-i=t-Ø=a-Øu)あとで，私が話す

のように「あと(で)」という時を表す名詞(＋格詞)が必要になる(図A10-4)。

(図A9-8, 図10-4 では，彼は現在歌っている最中である。) 構造図は図A10-2のようになる。

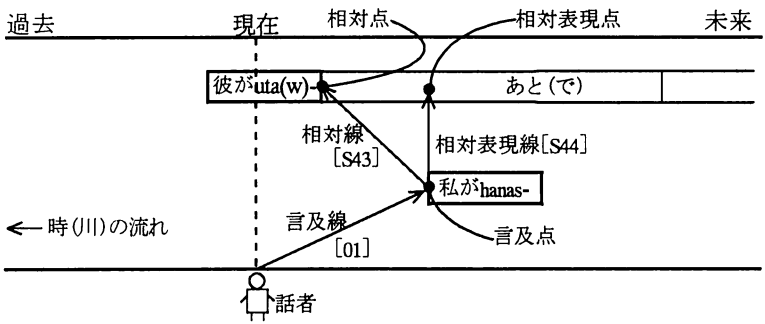


図A10-2 彼が歌ったあとで，私が話す



図A10-3 彼が歌っているときに，私が話す

「あと」という名詞を uta(w)- が修飾するわけだが，図A10-4 に見るように，従文動詞 uta(w)- は相対テンス・アスペクトが[S43] [以前・完了]である相対点においてアスペクト領域「あと」との関係を実現している。



図A10-4　彼が歌ったあとで，私が話す

そこで動詞 uta(w)- は修飾の際に [以前・完了] の形式である =t-Ø=a- の形式をとることになり，さらにこれを実体修飾形(連体形)にする -Øu を付加することになる。つまり，utaw-i=t-Ø=a-Øu (歌った)となるわけである(音便形についてはA3章参照)。

ここにも「相対点のズレ」が見られ,時の名詞節＋格(相対表現点)は[S44][同時・完了後]を表し,従文動詞(相対点)は[S43][以前・完了]を表している。

絶対テンス(話す)では未来の完了([03]「*あした私が話した」)は表現できない(舟の後部は前から見えない／視界外)が，相対テンス(歌う)では，相

対線の起点である言及点が従文出来事(歌う)の後ろにまわることが可能なので，相対線は従文出来事を後ろからとらえることが可能になる。

つまり，従文出来事であれば，話者の位置からすれば未来の完了[03]ではあっても，その完了を，バックミラーのような言及点を仲立ちとして，表現することができるようになる([S43])。

このように未来の完了([03]*彼が歌った)は，「視界外」ではあっても(従文動詞の)名詞修飾の場合なら表現できるのである([03]*彼が歌った→[S43]彼が歌った〈あと〉)。

未来(3)[同時]　彼が歌っているとき……従文出来事が[同時]の場合

図A9-8 の同時従文出来事「彼が歌う」は，

A10-4〉　彼が歌っているとき(に)，私が話す。

のような複文を形成する。絶対テンスはやはり未来である。構造は図A10-3のようになる。

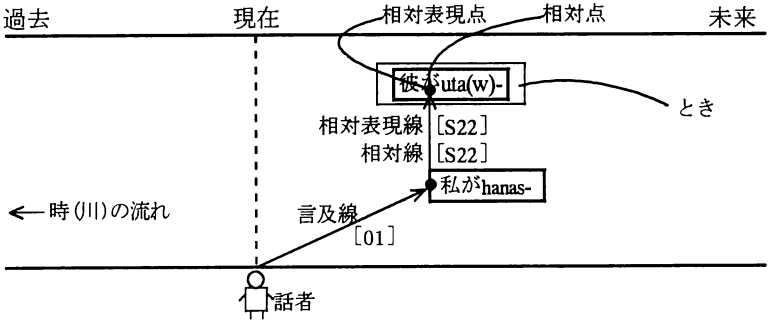


図10-5　彼が歌っているとき，私が話す

図A10-5 に見るように，従文出来事と主文出来事が同時に生起する場合，相対表現点(歌っているとき)は従文出来事の進行中のアスペクト領域内にある。一方，従文動詞の相対点(歌っている)も出来事の進行中のアスペクト領域内にある。つまり，相対表現点と相対点が一致するのである。ここには「まえ・あと」の場合に生じる「相対点のズレ」は生じない。

相対点のズレがないのだから，「まえ・あと」のようなアスペクトを補完的に明示する名詞は必要ないはずである。しかし，(従文)動詞基(歌っている)は(主文)動詞(話す)を直接に修飾することができない。(「基」は『文法』10.5)

A10-5〉 *彼が歌っている＿＿＿＿私が話す。

そこで，何らかの名詞が必要になり，「同時」を表現しやすい名詞「とき」が使用されることになる。

A10-6〉 彼が歌っているとき(に)，私が話す。(図A10-3)

「ている =te-Ø=i-ru 」の形式では，「てい =te-Ø=i- 」が進行中のアスペクト[S2]を示し，「る -ru 」が相対テンス[同時][S22]を示している。また，「る -ru 」は同時に連体形式でもあり，「とき」を修飾している。

なお，ここでは単位イベント(歌う)が進行中の場合を扱っているが，「とき」にはこれ以外のアスペクトを表示する機能もある。それで，「とき」の時空モデルでのアスペクト図示は，図A10-5 で示してあるように出来事の直前・直後の時間領域をも含む形にしてある。つまり，実は「とき」もアスペクトの補完領域を持つのである。これについてはA11章において述べる。

A10.2　絶対テンスが過去である場合……「私が話した」

以上，A10.1 の未来(1)～未来(3)で見てきたのは，絶対テンスが未来の場合(「私が話す」)である。絶対テンスが過去となる場合(「私が話した」)の構造図，時空モデル図も示しておきたい。

過去(1)[以後]　彼が歌うまえに……従文出来事が[以後]の場合

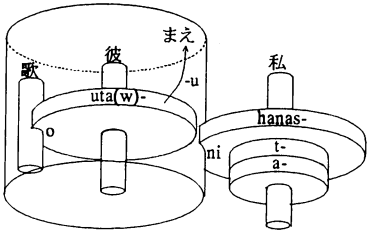
A10-7〉 彼が歌うまえに，私が話した。

構造図は図A10-6，時空モデル図は図A10-8のようになる。

過去(2)[以前]　彼が歌ったあとで……従文出来事が[以前]の場合

A10-8〉 彼が歌ったあとで，私が話した。

構造図は図A10-7 のように，時空モデル図は図A10-9 のようになる。



図A10-6 彼が歌うまえに，私が話した

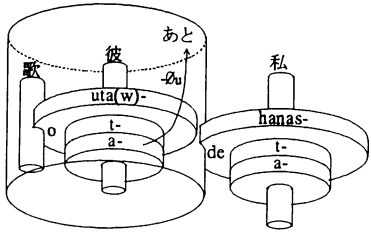
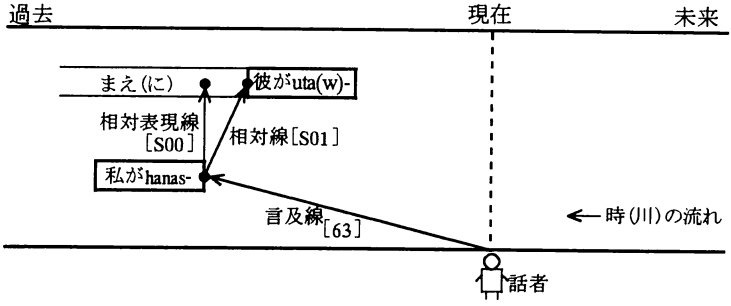
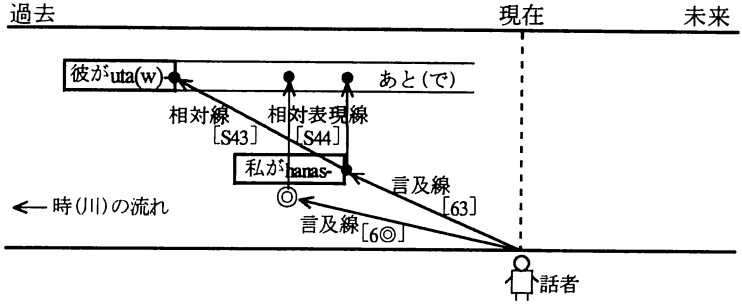


図10-7 彼が歌ったあとで，私が話した

なお，主文出来事「話す」のアスペクトに関心がない場合は出来事をひとまとまりのものとしてとらえ，[◎]で表示することになる(『文法』17.1)。その場合，言及線は[4◎](ヨンマル)ないし[6◎](ロクマル)となる。相対表現線は，言及線が[63][4◎][6◎]のいずれの場合でも，[S44]のままである。



図A10-8　彼が歌うまえに，私が話した

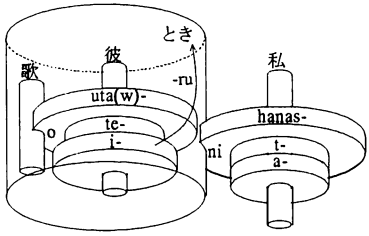


図A10-9　彼が歌ったあとで，私が話した

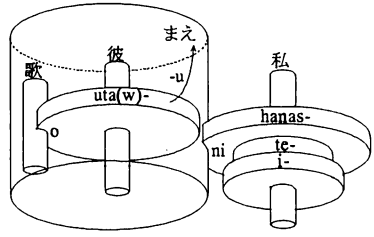
過去(3)[同時]　彼が歌っているときに……従文出来事が[同時]の場合

A10-9〉　彼が歌っているとき(に)，私が話した。

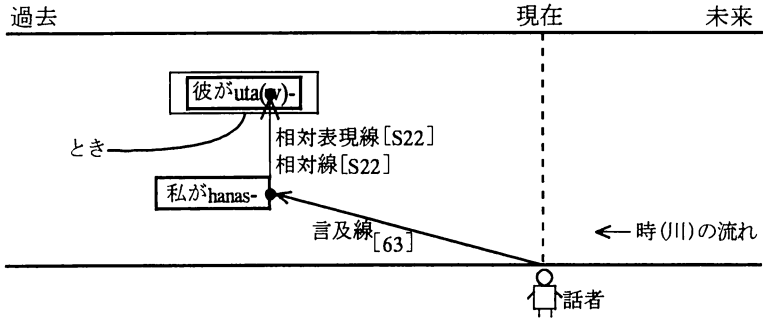
構造図は図A10-10 のように，時空モデル図は図A10-12 のようになる。



図A10-10 彼が歌っているとき(に)，私が話した



図A10-11 彼が歌うまえに，私が話している



図A10-12　彼が歌っているとき(に)，私が話した

A10.3　絶対テンスが現在である場合……「私が話している」

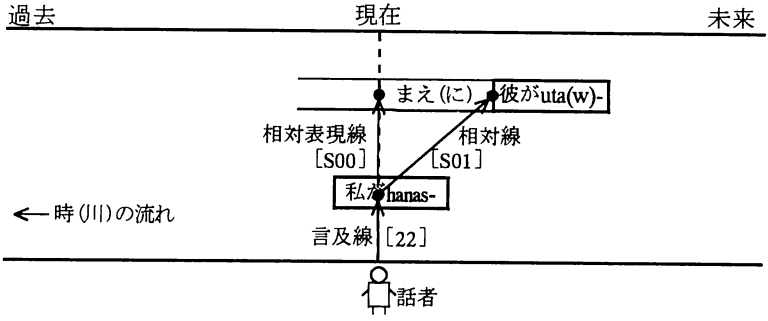
以上，A10.1 及び A10.2 において，絶対テンスが未来と過去の場合を図示した。次に，ここでは絶対テンスが「現在」(「私が話している」・アスペクトとしては進行中)である場合を示す。

絶対テンスが現在である場合は，相対テンスが(1)[以後]あるいは(2)[以前]であればこれまでと同様の要領でよいが，(3)[同時]の場合は「とき」の使用に関して制約が生じる。

現在(1)[以後]　彼が歌うまえに……従文出来事が［以後］の場合

A10-10〉　彼が歌うまえに，私が話している。

構造図は図A10-11 のように，時空モデル図は図A10-13 のようになる。

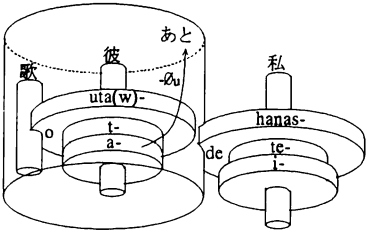


図A10-13　彼が歌うまえに，私が話している

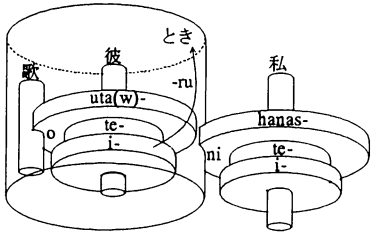
現在(2)[以前]　彼が歌ったあとで……従文出来事が[以前]の場合

A10-11〉　彼が歌ったあとで，私が話している。

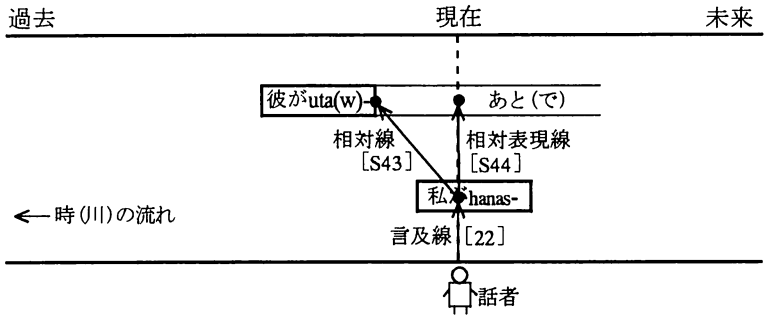
構造図は図A10-14 のように，時空モデル図は図A10-16のようになる。



図A10-14 彼が歌ったあとで，私が話している



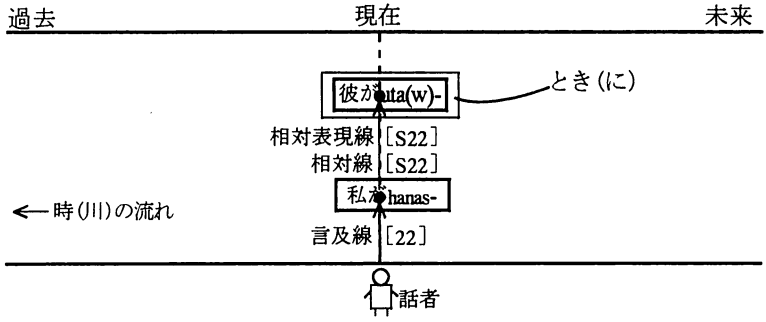
図A10-15 ？彼が歌っているときに，私が話している



図A10-16　彼が歌ったあとで，私が話している

現在(3)[同時]　彼が歌っているときに……従文出来事が[同時]の場合

構造図は図A10-15 のように，時空モデル図は図A10-17 のようになる。



図A10-17　？彼が歌っているときに，私が話している

相対テンス(相対線)が[同時]であり，絶対テンス(言及線)が[現在]である場合には，事実そのものを伝えようとするとき，「とき」は使用しにくい。

A10-12〉？彼が歌っているときに，私が話している。

「とき」が使用できるのは，事実そのものをではなく，その事実に対する話者の評価・説明・態度等を伝えようとする場合である。

A10-13〉　彼が歌っているときに，私が話しているのにはわけがある。

A10-14〉　彼が歌っているときに，私が話しているなんて。

これは，表現の必要性・表現の意図性に関係があると考えられる。この場合，複文としては両出来事の意義関係を伝えることに主眼があり，「とき」ではなく「のに・けれども・ので・から」等が用いられることが多い。

A10-15〉　彼が歌っているのに，私が話している。

A10-16〉　彼が歌っているけれども，私が話している。

両出来事を単に同時的なものとして伝えるためには次のような重文になる。

A10-17〉　彼が歌い，私が話している。

A10-18〉　彼が歌っていて，私が話している。

絶対テンスが[未来]あるいは[過去]であれば，事実そのものを伝えることが表現の必要性として受け入れられるので，「とき」でもやや自然になる。

A10-19〉　明日は，彼が歌っているときに，私が話している。
[未来進行中][02]

A10-20〉　昨日は，彼が歌っているときに，私が話していた。
[過去進行中][62]

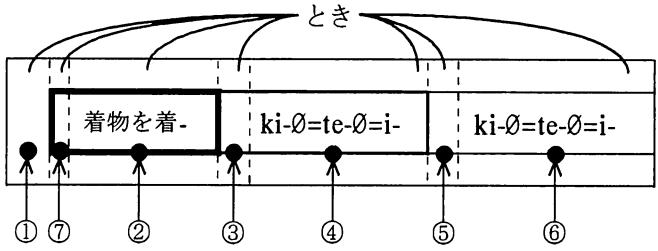
時空モデルでは単純に，↗ル，↑ル，↖タ ？　→ p. 151
従文・主文出来事の時間的位置関係をモデルにできる？　→ p. 152
従文・主文出来事の時間的位置関係を体系表にできる？　→ p. 157
絶対テンスと相対テンスの区別がつかない場合もある？　→ p. 158
「ル-ル，タ-タは絶対，ル-タ，タ-ルは相対」って本当？　→ p. 166
状態性の出来事の場合に注意すべきことは何？　→ p. 169
「そこにいた人はここにいます」は６通りに解釈できる？　→ p. 173

A11章

「とき」の特性

A11.1 「とき」は従文出来事生起時に相対表現点を持つ

図A11-1 に見るように，「とき」というアスペクト補完名詞は，従文出来事の①～⑦のアスペクトを示すことができる。図A11-1 において丸数字を伴って上を指している矢印は，相対表現線である。その矢印の示している黒丸は相対表現点である。(「ときに」の「に」は省略しておく。)



図A11-1 「とき」の表すアスペクト

① 着物を着る**とき**……出来事開始直前 [S11]

⑦ 着物を着た**とき**……出来事開始直後 [S77] (A4.4[A])

② 着物を着ている**とき**……出来事進行中 [S22]

③a) 着物を着た**とき**……出来事完了直後 [S33]

③b) 着物を着ていた**とき**……出来事進行完了直後 [S33]

④ 着物を着ている**とき**……出来事結果状態継続中 [S44]

⑤ 着物を着ていた**とき**……出来事結果状態消滅直後 [S55]

⑥ 着物を着ている**とき**……出来事記憶継続中 [S66]

このようにいくつもの相対表現点を持つ「とき」は，単一の相対表現点しか持たないアスペクト補完名詞「まえ・あと」と対照的である。

「とき」は図A11-1（また，図A10-5，図A10-12，図A10-17)に見るように，基本的にその従文出来事の生起時に相対表現点を持っている。これは「まえ・あと」での相対表現点が出来事の生起時と時間的距離を置いて，「相対点のズレ」を持っているのと対照的である。

A11.2 「とき」を修飾する従文動詞語の形態

いま，従文出来事に「着物を着る」，主文出来事に「電話をする」を使用することにすれば，「着物を着るとき電話をする」のような複文ができる。未来・現在・過去のすべてに通用するものとするために，絶対テンスは特定しないで，文末を「電話をS-」と表示することにする。

このとき，「とき」を修飾する従文動詞「ki-(着る)」の動詞語(『文法』5.1)・動詞基(『文法』10.5)としてとる形態は，次のようになる。

相対表現線が①であれば，出来事開始直前の領域にあるので，動詞は -ru によって「とき」を修飾する（A10.1 未来(1)「まえ」の説明参照)。

A11-1> ① 着物を ki-ru とき，電話を S- （着衣開始直前）

⑦であれば，開始直後であるので =t-Ø=a-Øu によって修飾する。

A11-2> ⑦ 着物を ki-Ø=t-Ø=a-Øu とき，電話を S- （着衣開始直後）

②では進行中であるので，動詞にはすでに =te-Ø=i- が付加さていて，これに名詞を修飾するための -ru が付く。

A11-3> ② 着物を ki-Ø=te-Ø=i-ru とき，電話を S- （着衣進行中）

③ではa)行為完了直後，b)行為進行完了直後の２つがある。両者ともアスペクトは「直後」であるので，=t-Ø=a-Øu によって修飾が行われる。

A11-4> ③a) 着物を ki-Ø=t-Ø=a-Øu とき，電話を S- （着衣完了時）

A11-5> ③b) 着物を ki-Ø=te-Ø=i-Ø=t-Ø=a-Øu とき，電話を S-
（着る行為進行完了時）

④では結果状態継続中であるので，動詞には =te-Ø=i- が付加される。

A11-6〉　④ 着物を ki-Ø=te-Ø=i-ru とき，電話を S-
(着衣状態継続中)

⑤では結果状態消滅直後であるので，動詞に付加されている =te-Ø=i- に =t-Ø=a-Øu が添加される。

A11-7〉　⑤ 着物を ki-Ø=te-Ø=i-Ø=t-Ø=a-Øu とき，電話を S-
(脱衣完了時)

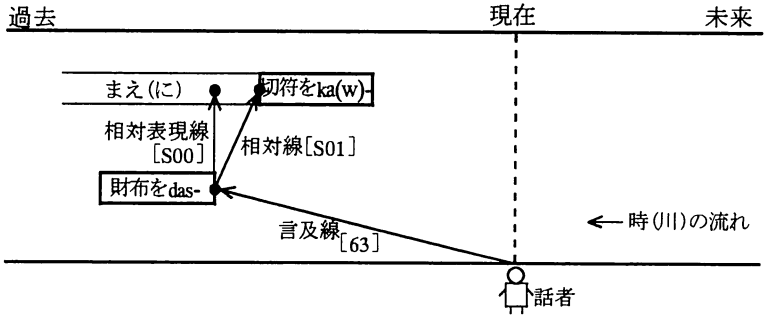
⑥では結果記憶継続中であるので，動詞には =te-Ø=i- が付加される。

A11-8〉　⑥ (だいぶ前に)着物を ki-Ø=te-Ø=i-ru とき，電話を S-
(記憶のみ継続中)

A11.3 「とき」は絶対テンスによって修飾される場合がある……過去

A11-9〉　(さっき)切符を買うまえに，財布を出した。

出来事の時間的位置関係は，図A11-2 に示すとおりである。まず財布を出し，財布からお金を出して切符を買ったわけである。

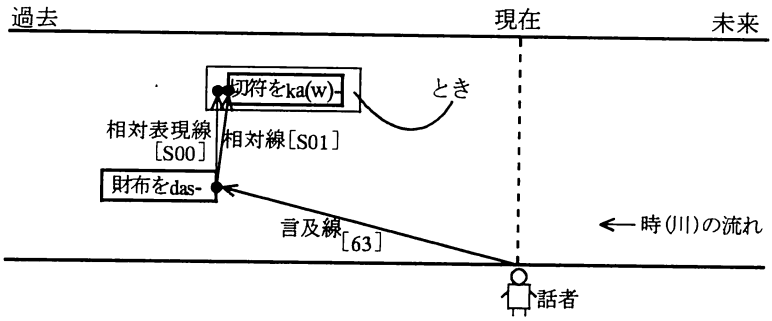


図A11-2　切符を買うまえに，財布を出した

この複文の名詞節の「まえ」を「とき」に換えた複文にすると，

A11-10〉　(さっき)切符を買うとき，財布を出した。

のようになり，図は図A11-3 のようなものになる。「とき」の場合は，事実はともかくとして，言語表現上は相対点のズレがほとんどなくなる。

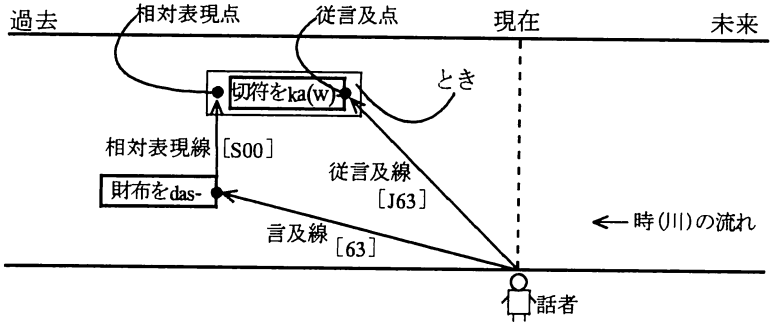


図A11-3 切符を買うとき，財布を出した

ところで，「とき」を使用すると，出来事の時間的位置関係は図A11-3 のままで，従文動詞「買う」を「買った」の形にすることが可能になる。

A11-11〉 (さっき)切符を買ったとき，財布を出した。(図A11-4)

タ形にしたからといって，切符を買ったあとで財布を出したことになったわけではない(もちろんその読みは可能であるが)。



図A11-4 切符を買ったとき，財布を出した

「とき」を用いる場合は従文動詞を絶対テンスで指定することが可能になり，「とき」のすべての相対表現線で扱えるアスペクト(図A11-1)を一括して指示することができるようになる。それで A11-11〉が可能となる。

これが可能なのは，従文出来事(切符を買う)と主文出来事(財布を出す)が一組のセットとして意識され，常識的に先後関係が明白であって，特にその

順序を明示しなくてよい場合である。明示する必要がある場合は図A11-1 中の一つのアスペクトが限定できる「相対テンス」を用いなければならない。

絶対テンスで指定する場合は言及線を用いることになるが，ここでは従文出来事を指定するので，「従言及線」・「従言及点」と呼ぶことにする。2桁表示する場合には[J63]のように記号[J]を添付することにする。

図A11-4 に見るように，アスペクト補完名詞「とき」を修飾するのは従言及点，つまりここでは完了時「買った ka-i=t-Ø=a-Ø 」[J63]である。しかし，ここで名詞節によって実際に表現されているアスペクトは出来事開始直前[S00]である。ここには「従言及点」と「相対表現点」のズレが見られる。「とき」の場合のズレはこのような形のものになる。

A11.4 「とき」が未来の絶対テンスによって修飾される場合

次の複文では「とき」が未来の絶対テンスによって修飾されている。

A11-12〉 (こんど)テレビを見るとき，(必ず)スイッチを切ります。
(図A11-5)

この文で示されるのは，まずテレビを見て，見終わってからスイッチを切る，という順序である。見るまえにスイッチを切る，という読みは可能ではあるが，非現実的である。

図A11-5 においては，やはり「従言及点」と「相対表現点」のズレが見られる。

ちなみに，同一の事実関係を表現するのに，「とき」を相対テンスで修飾することも可能で，その場合は次のようになる。

A11-13〉 (こんど)テレビを見たとき，(必ず)スイッチを切ります。
(図A11-6)

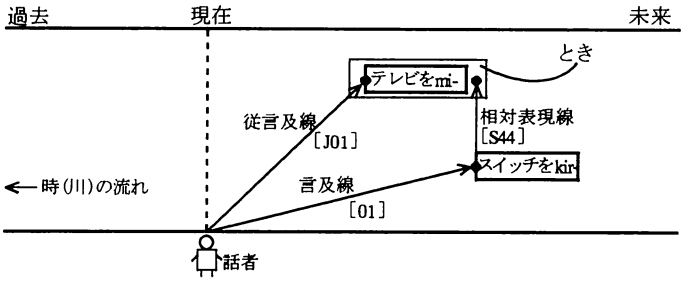
図A11-6 では，アスペクトが③a)に限定される。

なお，図A11-7 のように

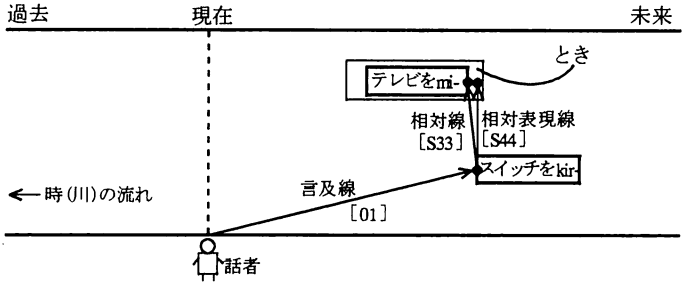
A11-14〉 (こんど)テレビを見たとき，いただいたビールを飲みます。

という「とき[S77]」(開始直後)もある(A11.1⑦)。この場合，ビールを飲む

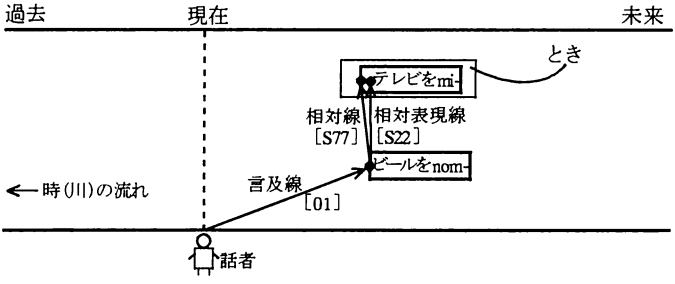
のは，未来においてテレビを見ることを開始したあとでの出来事である。



図A11-5 (こんど)テレビを見るとき，スイッチを切ります



図A11-6 (こんど)テレビを見たとき，スイッチを切ります



図A11-7 (こんど)テレビを見たとき，(いただいた)ビールを飲みます

A11.5　時(トキ)要素の並び

以上のA10章及びA11章で扱ったのは，名詞節が「まえ・あと・とき」という「アスペクトを補完する名詞」を伴う場合であった。このような複文でのテンス・アスペクトという時要素を簡単に示すことを考えたい。

たとえば図A10-4 に示した「彼が歌ったあとで，私が話す」という文の時を表す名詞節「彼が歌ったあと(で)」の相対表現点は[同時・完了後]であり，主文「私が話す」の言及点は[未来・開始]である。従文「彼が歌った」の相対点は[以前・完了]である。これらを次のように並べることにする。名詞節の要素は従文と区別して，(　)内に入れる。

彼が歌ったあとで，私が話す　　**表A11-1**

①	時の名詞節と主文を並べる場合	[(同時・完了後)／未来・開始]
②	従文と主文を並べる場合	[　以前・完了／未来・開始]

これを公式化すれば次表のようになる。(絶対テンスを「絶対T」，相対テンスを「相対T」，アスペクトを「アス」と略す。)

表A11-2

時要素の並び		相対(表現)点 ／ 言及点
①	時の名詞節と主文を並べる場合	[(相対T・アス)／絶対T・アス]
②	従文と主文を並べる場合	[相対T・アス／絶対T・アス]

このようにすると，図A10-12，図A10-13 の場合は次のように表現できる。

A10-9'〉 彼が歌っているときに，私が話した。　(図A10-12)

①[(同時・進行中)／過去・完了]

②[同時・進行中／過去・完了]　　相対点のズレなし。

A10-10'〉 彼が歌うまえに，私が話している。　(図A10-13)

①[(同時・開始まえ)／現在・進行中]

②[以後・開始／現在・進行中]　　相対点のズレあり。

このように要素を配列して，これを「時要素の並び」と呼ぶことにする。